

子ども学科初年次科目『基礎ゼミナール』を活用した 授業計画と成績評価の改善策

野々村 憲

Lesson Plans Utilizing Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts and Sciences Department of Childhood Studies, “Fundamental Seminar” and Improvement of student assessment in the lecture

Ken Nonomura

Through analysis of the current state of teaching in the Hiroshima Bunka Gakuen University and Japanese universities, I organized the problems facing universities today. And improving university teaching, I set three challenges. Three challenges are ① how to teach social common sense ② how to teach basic academic skills ③ solution for lowering of Student motivation for learning. For three challenges, I showed two proposals. One is the lesson plans utilizing “Fundamental Seminar”. And the other is the improvement of student assessment in the lecture.

キーワード

基礎ゼミナール Fundamental Seminar, 社会常識 Social Common Sense,
基礎学力 Basic Academic Skills, 成績評価 Student Assessment in the Lecture

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

1. 問題の所在

(1) 本学における筆者担当授業の現状と問題点
現在、筆者は広島文化学園大学長東キャンパスにおいて、学芸学部ならびに広島文化学園短期大学の授業を担当している。

教授内容は国語が中心であり、授業は講義形式がほとんどである。平成23年度筆者が担当する授業の受講人数は、右表のとおりである。

表1 平成23年度 講義の受講人数

学部学科	担当科目	人数
学芸学部	日本語表現 I	79
学芸学部子ども学科	国語	61
学芸学部子ども学科	保育内容 (言葉)	13
学芸学部子ども学科	基礎ゼミナール I	18
学芸学部子ども学科	基礎ゼミナール II	18
学芸学部子ども学科	卒業研究 I	1
学芸学部子ども学科	総合子ども学 II	90
短期大学 コミュニティ生活学科	日本語表現	23
短期大学 食物栄養学科	国語表現	46
短期大学保育学科	日本文化論	26
短期大学保育学科	保育内容の研究 (言葉)	71*

* クラス授業 (36人クラス・35人クラス)

表のとおり、4年生大学と短期大学の授業を兼担しており、受講人数では1名という少人数の授業から90名という多人数の授業まで幅広く受け持っている。

現在、筆者が授業を展開する上で、およそ以下のような問題点に直面している。

- ・多人数履修の授業において私語が多く、教師の指示が徹底しない。
- ・学習意欲の低下している学生が目につく。
- ・基礎学力における学生の個人差が大きい。基礎学力が不足する学生は、筆者の講義内容を理解し、消化することができない。
- ・授業を受ける態度で、社会常識（マナー）に欠ける学生が目立つ。

このような直面する問題点を解決するためには、どのような授業改善に取り組むべきなのか、という問題意識を持ち、授業改善の施策を立て、実践を試みたのが本論考である。

(2) 全国の大学における授業の現状と問題点

現在、全国の大学、短期大学の授業の実態はどのような現状であろうか。

全国の大学、短期大学における授業の現状を調査したものに『私立大学教員の授業改善白書』（平成22年度の調査結果）がある。この白書は公益社団法人私立大学情報教育協会加盟の大学309校、短期大学117校における専任教員（助教以上）：大学62,055名、短期大学2,478名を対象として、授業改善に関する調査を行った結果をまとめた白書であり、全国大学の授業の現状の傾向を把握することができる。

授業で直面している問題点【学生に関する問題】としては、図1のような調査結果である。

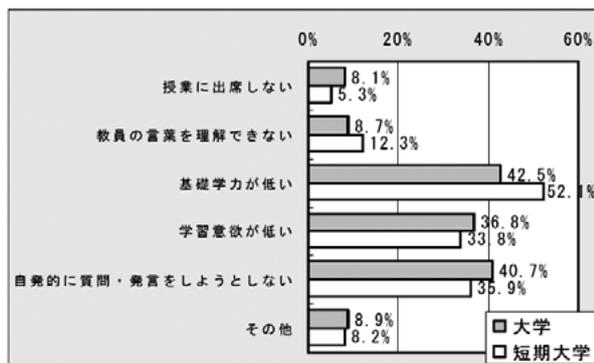


図1 授業で直面している問題点【学生に関する問題】

『私立大学教員の授業改善白書』2011, p.1

図1を見ると、全国の大学、短期大学の課題として、

- ・基礎学力の不足
- ・学習意欲の低下
- ・自発性の不足

が顕著な傾向であることがわかる。

特に「自発性の不足」に関しては、3年前に実施した調査結果では1割台であったが、本調査結果では4割台であり、学生の指示待ちで消極的な学習態度が浮き彫りにされている。白書では、その要因として「学びの動機づけ」が十分機能していないのではないかと推測している。

次に、授業で直面している問題点【教員自身の問題】としては、図2のような調査結果である。

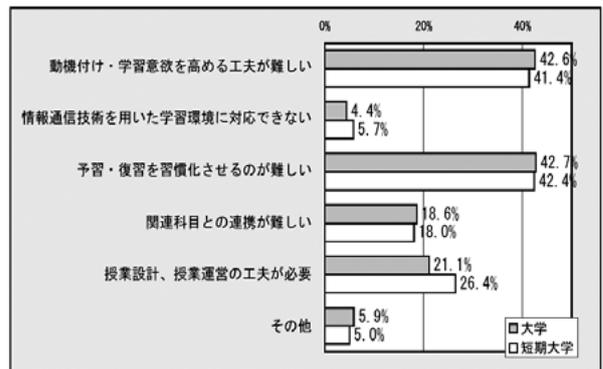


図2 授業で直面している問題点【教員自身の問題】

『私立大学教員の授業改善白書』2011, p.2

図2を見ると、学習意欲を高めるための工夫を課題として大きく取り上げており、さらに授業設計、授業運営の工夫の必要性を多くの教員が課題として受けとめていることがわかる。

また、予習・復習の習慣づけが難しいという課題が顕著な傾向である。白書では、この要因の一つとして、成績評価が「筆記試験中心」であることをあげ、例えば、授業中の学習態度や小テスト、レポート等の複合的な評価を取り入れる等の工夫が望まれると指摘する。

一方、全国の大学の授業や学生の実態報告ならびにその検証として、尾木直樹、諸星裕『危機の大学論』がある。著書では、大学の授業や学生の危機的な現状を徹底検証し、未

来の大学再生のカギは現場教員の「教育力」であると力説する。

この著書で尾木は、現在の大学には次の三つの役割が求められていると指摘する。

- ① 専門教育を行う
- ② 一般教育などを中心に教える
- ③ 生活力や社会常識を教える

尾木直樹, 諸星裕『危機の大学論』, pp. 24~25

①②は大学教育として自明のことであろうが、③に関しては、従来より高校段階までの学校教育で身につけるべきものであり、大学教育では重要視してこなかった。しかし、現在の大学生の実態を見れば、今後大学において、③の教育的役割は非常に重要な意味を持つだろうと推測できる。

本学における筆者の担当する授業の現状ならびに全国の大学の授業の実態をふまえた上で、筆者は授業改善に向けた課題として以下の三点を設定した。

- ① 社会常識（特にマナー）をいかに教授すべきか。
- ② 基礎学力をいかに教授すべきか。
- ③ 私語や学習意欲の低下への対策、授業への動機づけをどのように解決すべきか。

2. 授業の改善のための施策とその実践報告

- (1) 『基礎ゼミナール』を活用した授業改善
平成23年度より、授業改善に向けた課題①②への取り組みとして、学芸学部子ども学科の授業科目『基礎ゼミナール』を活用することにした。

① 『基礎ゼミナール』概要

広島文化学園大学学芸学部子ども学科は、初年次開講科目として『基礎ゼミナールⅠ』『基礎ゼミナールⅡ』（いずれも卒業必修）を開講している。この講義の目的は、入学後初年次にあたり、建学の精神・教育理念を理解した上で、本学科で学ぶ目的を明確にし、大学での学び方を身につけ、大学生として講義を理解するための基礎学力を高めることである。授業はセミナー&チューター制度（*注）のもと、教員と学生とが信頼を築きながら、少人数制での演習形式で行っている。

（*注）セミナー&チューター制度

本学の教育方針を具現化するための教育指導体制のことである。学生生活や修学上の様々な問題の相談相手となるのがチューターである。チューターは、学生とつながりの深いゼミナール担当の教員が授業を中心として、指導を展開している。

② 『基礎ゼミナール』の授業計画と実施状況

a 授業計画

初年次前期『基礎ゼミナールⅠ』・後期『基礎ゼミナールⅡ』を有効に活用し、大学生に求められる社会常識と基礎学力を教授する授業計画を立てた。

学生にとっての重要度を考慮し、早いうちに社会常識（特にマナー）の大切さを徹底して指導し、その後に基礎学力を高めていくという流れを作った上で、前期『基礎ゼミナールⅠ』で社会常識を身につける授業計画、後期『基礎ゼミナールⅡ』で基礎学力を身につける授業計画を組み立てた。

『基礎ゼミナールⅠ』の授業計画は以下のとおりである（表2）。

表2 『基礎ゼミナールⅠ』授業計画

回	講義内容
1	授業ガイダンス
2	社会常識（マナー）の基本
3	【*1】 幼少期におけるしつけ
4	立居ふるまい(1) 姿勢・おじぎ
5	立居ふるまい(2) 装いと立居ふるまい
6	【*2】 言葉づかい(1) 先生としての敬語
7	言葉づかい(2) 先生としての電話応対
8	手紙のマナー
9	【*3】 俳句入門
10	食事のマナー
11	冠婚葬祭のマナー(1) 結婚式・披露宴
12	【*4】 冠婚葬祭のマナー(2) 葬儀
13	冠婚葬祭のマナー(3) 年中行事
14	【*5】 社会人としての着こなし
15	社会人としてのビジネス・マナー

【*1】～【*5】小テスト実施

『基礎ゼミナールⅠ』の授業では、テキストとして毎時間筆者が作成した書き込み式の授業プリントを配布し講義を進める。また、マナー指導ということで、視聴覚教材を効果的に使用したいと考え、必要に応じて、DVD教材を使用する。

学習成果の評価としては、15回の授業の中で、5回の小テストを実施し、これに加え、必要に応じて、ノート提出、レポート提出を課す。

『基礎ゼミナールⅡ』の授業計画は以下のとおりである（表3）。

表3 『基礎ゼミナールⅡ』授業計画

1	授業ガイダンス
2	語句の定義(1) / 演習問題
3	語句の定義(2), 対義語 / 演習問題
4	語句の状況, 熟語の完成 / 演習問題
5	短文の完成, 語句の用例 / 演習問題
6	会話文, 類義語 / 演習問題
7	漢字読み, 漢字書き / 演習問題
8	到達度テスト(日本語)
9	数と式 / 演習問題
10	方程式, 不等式 / 演習問題
11	関数 / 演習問題
12	図形 / 演習問題
13	順列, 組み合わせ / 演習問題
14	到達度テスト(数学) / 演習問題
15	まとめ

『基礎ゼミナールⅡ』は基礎学力を高める目的で授業計画を立てた。基礎学力の中でも特に、中核となる科目は「国語」「数学」であろう。そこで、この2科目を中心に授業を進めることにした。

授業をすすめるにあたって、テキストならびに学習評価をどのようにすべきかと検討した結果、株式会社旺文社の「学習成果到達度システム」を利用することとした。

このシステムは、旺文社が長年培ったテ

スト実績とノウハウを生かし、大学生・短大生の基礎学力スキルアップのためのテキスト（日本語・英語・数学・物理・科学・生物・コミュニケーション力・思考力）を作成し、テキストでの学習後、さらなる学習の成果（到達度）を確認するテストを実施するというシステムである。実施したテストを当社に返送すると、テスト結果として、個人別学習到達度測定結果が返送されるので、そのデータをもとにして、各自、自分の基礎学力の現状を客観的に判断することができるし、チューターは個別指導ができるというわけである。

授業の前半で、国語のテキスト内容を教授した後に、学習成果到達度テスト（日本語）を実施する。授業の後半は、数学のテキスト内容を教授した後に、学習成果到達度テスト（数学）を実施する。

学習成果の評価は、毎時間に実施した演習プリント、宿題プリントの提出状況と学習成果到達度テスト結果により実施することとした。

・使用テキスト

『大学生・短大生のための国語テキスト』
(旺文社)

『大学生・短大生のための数学テキスト』
(旺文社)

・試験

『学習成果到達度テスト（日本語）』
(旺文社)

『学習成果到達度テスト（数学）』
(旺文社)

b 実施状況

『基礎ゼミナールⅠ』は、すでに授業計画どおり実施し、終了した。前年度（平成22年）までのゼミナールと比較し、本年度実施した授業内容は、社会常識（マナー）を身につけようという明確な目標があり、学生にとってはしっかりとした学習への動機づけになったと考えている。

また、15回の授業内に、授業内容の理解度を確認する意味で行った小テストの実施により、学生の授業に対する集中度も依然より高まったように感じる。小テスト結果のデータを集計することにより、いままで以上に、ゼミ生一人ひとりの学習への取り組み状況が見えてくるようになった。

今後、授業の教授方法に関しては、さらに一層、研究を深め、学生の興味関心が深まるような授業を展開したいと考えており、次年度にむけ、さらに授業改善に取り組みたいと考えている。

『基礎ゼミナールⅡ』は現在、授業進行中であり、本論考では実施状況報告に至らない。本年度後期に実施した『基礎ゼミナールⅡ』の結果報告とその考察は、次年度の紀要で報告する予定である。

(2) 授業における成績評価システム改善策

授業改善に向け、「私語や学習意欲の低下への対策、授業への動機づけをどのように解決すべきか」という課題を提示した。

この課題に対しては多面的な角度からのさまざまな取り組みが考えられるだろう。本論考で提示するのは特に、授業の成績評価のあり方という観点からの授業への改善策である。

高等学校を中心とした学校現場では、従来より学力偏差値重視の評価が続いてきたが、この偏差値重視のあり方に対する社会的な批判が大きくなり、現場の評価システムは大きく変化した。いわゆる「偏差値よりも人柄を」などといわれ、学習だけでなく、日常の出欠遅刻の状況等、授業中の態度や人柄までも多面的に評価する内申システムへと転換したのである。

それと比較し、大学における学生の評価システムは、従来より依然として期末試験による評価が続いている。

高等学校で多面的な評価による指導を受けた生徒が大学に入学したからには、大学の成績評価もさらに改善していかなければ、学生の授業への動機づけや学習意欲が高まらないのではないのか、というのが筆者の考えである。

大学設置基準では、「(単位の授与) 第二十七条 大学は、一の授業科目を履修した学生に対しては、試験の上単位を与えるものとする。」と定めている。「試験の上単位を与える」とあるので、「試験」は必ず実施して評価しなければならない。

しかし、期末試験は必ず実施しなければならないが、その上で、授業期間内に実施する授業内の小テスト、レポート提出、宿題提出等による「中間段階での学習成果」を評価して、期末試験の評価に加算することには問題

がないわけであるから、今後の大学における成績評価は、「中間段階での学習成果」を積極的に評価し、取り入れていくべきであろうと考える。

その具体的な施策は以下のとおりである。

筆者は成績の総合評価を100点とした場合に、その内訳を「中間段階での学習成果」60点「期末試験」40点の割合と設定した。

「中間段階での学習成果」60点の内訳を、筆者の担当科目「日本語表現Ⅰ」の場合、以下のように設定した。

- ・小テスト①②③④ (各10点×4)
- ・課題提出①② (各5点×2)
- ・宿題提出①② (各5点×2)

この成績評価に関しては、シラバスで明確に開示し、授業第1回のガイダンスにおいて、学生に指導し浸透させることとする。

学期末の試験を待つという間延びした緊張感のなさは、平常の小テスト、課題提出、宿題提出という中間段階での学習成果の評価により解消されていくとともに、平常の学習課題をこなしていかなければ、成績評価の加算につながらないということで、学生の学習意欲への自覚をさらにうながすことができるのではないか。

すでに平成23年度後期より、筆者は試験的にこの成績評価で授業に取り組んでいる。取り組んでみてわかることは、学生の授業に対する取り組み姿勢が変わってきたということである。授業に対する動機づけが明確になったので、学生の授業に対する意欲が高まり、私語やいねむりをする学生は格段に減少したように感じる。

また、小テストの実施、課題や宿題提出により、学生のきめ細やかな成績評価データを構築することができるようになり、この成績評価データを分析することで、学生一人一人の授業への取り組み状況がより一層把握できるようになった。

反面、教員の日々の教育における授業準備ならびに授業後の事後処理の時間が以前よりも格段に増加したという事情もある。教材研究、課題やテスト作成ならびに小テストの採点や提出物の点検に追われる毎日である。

しかし、未来の大学再生のカギが現場教員の「教育力」にあるとするならば、この取り

組みの方向性は妥当なものではないかと考えている。

今後さらに、この成績評価改善策を深め、学生への指導を進めていきたいと考えてい

る。授業の成績評価改善策による取り組みに関しては、次年度の紀要でさらに詳細を報告する予定である。